

チャーサーの不定詞 (I) *
主語機能の不定詞

松瀬 憲司

0. 序

近代英語(以下 ModE)で主語機能の不定詞に該当するものとしては、次の様なものが挙げられる。

- (1) a. To obey the laws is our duty.
b. It is not allowed to smoke here.

(1a)は to 不定詞 (以下 to Inf) である To obey が文構造上、定動詞 is の文法的主語である純粋な主語機能の例であるのに対し、(1b)では定動詞の構造上の(文法上の)主語は It であるが、意味的には不定詞の to smoke が定動詞の主語と捉えられる。即ち、伝統文法で言う「意味上の主語」にあたるのが to smoke であり、文法上の主語である It は「仮主語」とか「形式主語」と呼ばれているものである。そこで本稿では、(1a)のような構造的な主語機能を持つ不定詞と(1b)のような意味的主語機能を持つ不定詞を一括して「主語機能不定詞」と呼ぶことにする。¹ このようにして主語機能不定詞を定義すると、(1)のModE の例文は、形式主語の it を持つものと持たないものに分類することが可能だが、実は、この形態上の分類法は 古英語(以下 OE) や中英語(以下 ME)にも当てはめることができる。この形式主語の it の有無による分類法を利用し チャーサーに於ける主語機能不定詞を『カンタベリ物語』全19355行を資料として記述することを本稿の主目的とし、そこから派生する二三の問題を論じていくことにする。

なお、チャーサーの作品に現れる不定詞の形態は、上例(1)のような to Inf の他に、一般にModEでは主語機能の不定詞とは成り得ない「原形不定詞 (以下 bare Inf) やME期とModE初期にのみ姿を現す「for to 不定詞(以下 for to Inf)」があるので、これらの不定詞の生起状況にも言及していく。特に、bare Inf と「前置詞不定詞 (to Inf と for to Inf をあわせてこう呼ぶことにし、

以下 prep Inf)」との競合に注目していきたい。

本稿の構成は、まず1章で形式主語の *it* の有無による分類を行いその結果から、2章での人称対非人称の対立関係を導き出す。3章では韻文対散文の関係を視野を拡大して主語機能の不定詞を論じる。そして4章の「結び」で分析結果を纏めることにする。

1. 形式主語の *it* による分類

この章では、形式主語の *it* と主語機能不定詞との競合関係を英語史的に概観し、その中でチョーサーの位置付けを明確にした上で、不定詞の両形態と形式主語の *it* の出没との関連を探る。

F. Th. Visser (1966: § 915) は主語機能不定詞を形式主語の *it* を持つものと持たないものに二分し、更に両者を幾つかのタイプに分類している。先ず、形式主語の *it* を伴わない構文は全部で10種類挙げられており、そのうちOE期からの発達が5種(下例(2))、ME期からが4種(下例(3))、そしてModE期からが1種(下例(4))という内訳になっている。²

- (2) a. Cidan on swefnum ceapes eacan getucnath.
(Leechdoms (Cockayne) iii 208)
- b. Geat ... restan lyste. (Beowulf 1793)
- c. 3od is ondettan dryhtne. (Junius Psalter (Brenner) 91.1)
- d. mael is me to feran. (Beowulf 316)
- e. Us gelustfulla ð gyt fur ð ur to spreenne.
(AElfric Homilies i 360.29)
- (3) a. To herkene Goddis word is more than to offre the ynnere
fatnesse of rammes.
(Wyclif 1 Sam. xv 22)
- b. Now is routhe to rede, ... (Piers the Plowman B xv 50)
- c. for to vse chaungable, or now oon, now another, is delitable.
(Wyclif 2 Mac. 15.40)
- d. I to mak me blith or glad ... that nu mai be.
(Cursor Mundi (Cott.) 10459)

(4) For man to tell how human Life began/Is hard.

(Paradise Lost Book VIII 250)

上例(3a)より、例文(1a)のような to Inf が直接文法的主語の位置を占めるタイプはME期からの発達であって、OE期には存在しなかったものであることがわかる。更に、上例 (2b)から(2e)を見れば、OE期から存在した形式主語の it を伴わない構文のほとんどは非人称構文であることが理解できる。

これに対して、形式主語の it を伴う構文は12種類挙げられており、その内訳はOE期からの発達が7種(下例(5))、ME期からのものは5種(下例(6))である。即ち、ME期でこの構文の発達は完了しているのである。

(5) a. better hit is suwian thonne sprecau.

(Interlinear Rule St. Benet (ed. Logeman) 11.5)

b. thou yzixt thet hit behoueth zuo dyere abegge onlepy dyad-
lich zenne. (Avenbite 73.27)

c. hit is sceame to tellanne ac hit ne thuhte him nan sceame
to donne. (Old English Chronicle anno 1085)

d. It sit a prest to be wel thewed. (Confessio Amantis 1.272)

e. Hit is earmlic and sorhlic eallum mannum to gehyrenne ...
(Wulfstan, Polity (Jost) p.245 §70)

f. sceamu hyt is menn rellan wesau thaet thaet he ys.
(AElfric Colloquium (ed. Garmonsway) 242)

g. Nu bicometh hit ... to unwilchen cristene monne to hali-
gen thenne dei (Lambeth Homilies 45)

(6) a. it is no shame forto swinken (Havelok 799)

b. it spedith o man for to deie for the peple.
(Wyclif John 18.14)

c. And if it falle ... A man to lese so his galle
(Confessio Amantis 3.703)

d. it is tyme for Sir Thomas to forsake hym.
(Paston Letters (Gairdner) II 237)

e. It is folie for hir to sett hir hert on any man that be
so changeable. (King Ponthus (ed. Mather) 36.7)

上例 (5a, c, e, f) より、OE期から既に形式主語を伴って表される人称構文が存在することが知られるので、英語史的に見て、人称構文に於て形式主語の *it* を使用する構文の方が、不定詞そのものが主語の位置を占める構文よりも古いということになる (上例 (3a) 参照)。³

では、後期MEで書かれた『カンタベリ物語』に於ては主語機能不定詞と形式主語の *it* とはどのような共起関係を示すのだろうか。まず、具体例を呈示する。⁴

- (7) a. But ik am oold; me list not pley for age; (Rv. 3867)
 b. To sclaundre yow is no thing myn entente, (CY. 998)
 c. ... and for to entende
 To lerne bookes was al hire likyng, (Mk. 2308-09)
- (8) a. It nedeth nat to yow reherce it moore. (Fkl. 1594)
 b. I am a kyng; it sit me noght to lye." (Mch. 2315)
 c. It were ful hard by ordre for to seyn
 How many wondres Jhesus for hem wroghte (SN. 358-59)

例文(7)は *it* を伴わない例であり、(8)は *it* と共起する例である。(7a)では bare Inf の *pley* が非人称動詞の論理的な主語として機能しているのに対し、(7b, c)では prep Inf が直接 *be* 動詞の文構造上の主語の位置を占める人称構文を形成している。一方(8a, b)は、非人称動詞 *nedeth*, *sit* を使用した非人称構文での主語機能不定詞の例であり、(8c)は *it* を使用した人称構文に *for to* Inf が現れている例である。次に、上例(7)(8)のような主語機能不定詞がどのような分布を示すかを調査したのが表 I である。⁵

表 I

	bare Inf	prep Inf	[to Inf : for to Inf]	Total
-it	58	114	[89 : 25]	172 (59.5%)
+it	5	112	[81 : 31]	117 (40.5%)
Total	63	226	[170 : 56]	289 (100%)

表 I から明かなように、『カンタベリ物語』では形式主語の *it* を伴わない構文が 59.5% と、*it* を伴う構文の 40.5% よりもかなり高い比率を示している。では、この傾向は ME 期を通じて言えるものなのだろうか。このことを検証するために、若干の同時代の作品の数値との比較を表 II で試してみた。

表 II

	-it	+it
<u>Piers the Plowman B</u> (c1378) ⁶	17 (29.8%)	40 (70.2%)
<u>Gawain-Poet's works</u> : ⁷		
<u>Peral, Purity, Patience</u> (?1380)		
<u>Sir Gawain and the Green Knight</u> (?c1390)	78 (80.4%)	19 (19.6%)
<u>Wyclifite Sermons</u> (1376-1412) ⁸	14 (17.7%)	65 (82.3%)
<u>The Canterbury Tales</u> (c1385-a1400)	172 (59.5%)	117 (40.5%)

一見したところ、作品によって形式主語の *it* はよく使われたり、そうでなかったりしており、そこに一定の傾向を見いだすのは難しい。ところが、この表 II の状況に関して説明を与えられる一つの仮説がある。それは後期 ME から初期 ModE にかけての統語法の動揺のうちの一つである「非人称構文から人称構文への遷移」に関することである。

it の出没に関しては先ほどその英語史的背景を概観したが、それは、「人称構文に於ては *it* を使用するタイプの方が古く、直接不定詞を主語の位置におくタイプは ME 期からの発達である」というものであった。では、非人称構文に関してはどうであろうか。Mustanoja (1960) は次のように説明する。⁹

- (9) Since OE it has occurred as the subject of an impersonal statement:... More often, however, it is not used. (p.131)
- Non-expression of it in conjunction with impersonal verbs or statement is very common, one might say the rule, in ME:... (p.143)

即ち、ME 期には非人称構文は形式主語の *it* を伴わないタイプが一般的であっ

たのである。ということは、it が多用されるほど、人称構文が優勢であることを示唆し、逆にit があまり使用されないならば、依然として非人称構造及び非人称動詞を使った構文の方が勢力を持っているということになるだろう。この it の有無と人称対非人称との間に存在する関連性を次の表Ⅲは明確に示していると言える。

表Ⅲ

	Personal	Impersonal	Total
-it	20	152	172
+it	82	35	117
Total	102	187	289

非人称構文では -it(it を伴わないもの)が152例に対し、+it(it を伴うもの)が僅か35例と圧倒的に-itが多いのだが、他方、人称構文では-itが20例に対し、+itは82例と、-itの4.倍の数値になっている。勿論、このことは『カンタベリ物語』以外の資料では確認していないので、妥当性に欠ける点もあるが、表Ⅲの数値のばらつきを説明する可能性はあると思われる。ともあれ、少なくとも『カンタベリ物語』に於ては、形式主語の it の有無と人称・非人称との対立とは何等かの関係があると言えるだろう。

そこで、次章でこの人称対非人称の対立を利用して主語機能不定詞を分析する。

2. 人称構文と非人称構文による分類

この章では、人称構文と非人称構文とを比較検討し、主語機能の原形不定詞と前置詞不定詞がどのような競合関係にあるかということを中心に考察する。

2.1. 人称対非人称と bare Inf 対 prep Inf

先ず、本稿で言う人称・非人称を下例(10)により定義しておく。

(10) a. If that hym list to stonden ther-agayns. (Fri.1488)

- b. Ful lief were me this conseil for to hyde. (Sh. 159)
 c. It nedeth nat to yow reherce it moore. (=8a)
 d. To sclãundre yow is no thyng myn entente. (=7b)
 e. That it is joye to se my bisynesse (Pard. 399)

「非人称 (Impersonal)」とは、文型SVXが例文(10a)に於ける list のような非人称動詞を V (定動詞) に持ち、文法上の主語であるSを欠いているか、或は例文(10b)のように were は非人称動詞ではないが、明らかに主語に相当する S を欠いている非人称の構造をしているものかのいずれかを指すのであるが、上例 (10a)のような非人称動詞を使った構文が形式主語の it で満たされた場合の(10c)も、nedeth は依然として非人称動詞であるから、非人称と見なす。これらの非人称構文の意味上の主語として不定詞が機能しているのであり、文法的な主語として機能しているのではない。

これに対して、人称構文に於て主語機能の不定詞は、例文(10d)のようにいわゆる文法的な主語として機能するか、或は、(10e)のように形式主語の it をたて自らは意味上の主語として機能するかのいずれかの働きを持つ。さて、以上の定義を一応確認したうえで、『カンタベリ物語』に於て、原形不定詞及び前置詞不定詞が人称構文と非人称構文の(意味上の)主語としてどのように機能しているかを示したのが次の表IVである。

表IV

	bare Inf	prep Inf [to : for to]	Total
Personal	1(?)	101 [71 : 30]	102
Impersonal	62	125 [99 : 26]	187
Total	63	226 [170 : 56]	289

そして表IVの具体例を下例(11)～(13)に挙げる。

- (11) a. it were bettre dwelle in desert than with a womman that
 is riotous. (Mel. 1087)
 b. That I may doon, right as yow list devise. (Sh. 192)
 c. as gret a craft is kepe wel as wynne.

(Troilus and Criseyde III·163^A [quoted by Kenyon (1909: 115)])

- (12) a. To breke forward is nat myn entente (ML. 40)
 b. Ther nedeth noght noon auctoritee t' allege (Kn. 3000)
- (13) a. That it was deyntee for to seen the cheere
 Bitwixe hem two, (Cl. 1112-13)
 b. But me were levere than al this toun," quod he,
 "Of this despit awroken for to be. (Mil. 3751-52)

各例文の a は人称構文、b は非人称構文である。人称構文の例では、(12a)がいわゆる文法的主語として to Inf が機能している例であり、(11a), (13a)は形式主語の it を伴っている。一方、非人称構文の例では、(13b)がbe動詞を使った非人称構文をしているのに対し、(11b)には list, (12b)には nedeth という非人称動詞が使用されている。

先ず、bare Inf から検討する。表IVからわかるように、bare Inf が人称構文の主語として機能する例は殆ど存在せず、¹⁰今回の調査でそれに該当すると思われるものは僅かに(11a)の一例にすぎない((11a)は it を伴った非人称構文とも捉えられるからである)。Kenyon (1909) は人称構文に現れる主語機能の bare Inf の例として(11c)の kepe を挙げているが、このような直接主語の位置に来る bare Inf の単独例は発見できなかった。逆に言えば、bare Inf が主語として機能する主な領域は非人称構文であると考えられる。同様なことはガウェイン詩群(表II参照)にも言える。田島(1972:10)はこの作品群の非人称構文66例中に bare Inf が43例(約65%)を占めると報告している。ところが、Karttinen and Mustanoja (1958)は散文の資料である A Book of London English 1384-1425 に bare Inf が定動詞の主語として機能する例はないとしているし、¹¹Warner(1975:208)も散文で書かれたウィクリフ説教集に主語機能の bare Inf を発見していない。以上のような事実から判断すれば、散文に於て bare Inf は人称・非人称に拘らず、主語としては機能しにくく、韻文に於ては非人称構文に現れ易いということになるだろう。このことに関しては、後で散文と韻文の比較のところでもう一度確認する。

次に prep Inf を見てみよう。まず、to Inf だが、これはその用例数170からしても主語機能の不定詞として最も一般的なものであると言える。この事実

はME期に於ける to Inf の優勢を裏付けるものである。¹²なぜならば、Callaway (1913)はOE期には to Inf 1 に対し bare Inf は2.95の割で使用されたという統計結果を出しているので、¹³ME期にはその形勢が逆転したことが、この主語機能の不定詞一つをとっていても伺い知ることができるのである。また、表IVを見る限りでは、非人称の用法が若干多いようであり、to Inf が直接文法的の主語になる例文(12a)のタイプが12例に対し、形式主語の it を伴うタイプ(下例(14))が59例と、圧倒的に多いのが特徴的である。

- (14) a. Now is it bihovely thyng to telle whiche been the sevene
deedly synnes, (Pars. 387)
b. It is ful lasse harm to lete hym pace, (Co. 4409)

これは(12a)のような to Inf が直接文法的の主語になるタイプは ME期からの発達なのだが、『カンタベリー物語』では依然としてOE期からの形式主語の it を使用する人称構文の方が好まれたことを示しているように思える。更に言えば、この傾向はModE期にまで持ち越されている。

最後に、for to Inf だが、これは人称・非人称とも殆ど同じような使われ方をしている。ただ、prep Inf 内で比較すると、for to Inf は明らかに to Inf よりも使用頻度は低いのだが、散文の A Book of London English 1384-1425 での、to Inf 74 に対し、for to Inf 5 や、¹⁴ ウィクリフ説教集での to Inf 49 に対し、for to Inf 3 に比べると、¹⁵ 『カンタベリー物語』の to Inf 170 に対し、for to Inf 56 はかなり高い使用率と言っている。また、もう一つ重要なことは、小野 (1969)によれば、初期MEではこの for to Inf は殆ど「目的を表す付加詞」としての機能しか持っていなかったということだが、¹⁶ ME期に機能拡大をおこし、to Inf が持つ機能領域全般に進出し、この主語機能も例外ではないということである。ちなみに今回の調査では for to Inf は主語機能の不定詞としては約20%程度を占めることが判明している。

2.2. 主語機能不定詞と非人称動詞及び非人称構造との共起について

この節では、どの非人称動詞や非人称構造がどの形態の不定詞と共起しやすいかということを検討する。以下用例数の多い代表的なものを挙げ、分析を試みる。

(15) LIST(E) [52 exs.] bare Inf : prep Inf = 23 : 29

- a. And other swiche, if that me liste tarie; (CY. 801)
 b. No thyng list hym to been ymaginatif. (Fkl. 1094)

このlist(e)という非人称動詞が『カンタベリ物語』の中で最もよく使用される。bare Inf, prep Inf とともに同じような共起関係を示している。異形には、lest(e), lust がある。

(16) NEDETH [32 exs.] bare : prep = 11 : 21

- a. What nedeth yow diverse freres seche? (Sum. 1955)
 b. ..., it nedeth nat for to declare. (Mch. 2437)

prep Inf と共起しやすい非人称動詞と言える。この nedeth は(16a)のように修辭疑問文であるとか、(16b)のように否定辞 nat を伴うなど、必ず否定の文脈で使用されるという特性を持つ。¹⁷

(17) OGHTE [18 exs.] bare : prep = 12 : 6

- a. yow ne oghte nat sodeynly ne hastily proceden in this
 nede, (Mel. 1341)
 b. to whiche hym oghte to ben obeisaunt in alle right-
 wisenesse. (Pars. 676)

oghteは人称動詞としても機能することができ、人称動詞の場合は、bare Inf との共起が規則であるが、非人称で使用される時は(知覚的混乱が皆無であっても、即ち、oghteと不定詞間に何等介在するものがない時、例えば、(17b)のような時であっても)、prep Inf と共起できる。¹⁸ただ、非人称の oghte とは言え、bare Inf との共起率の方が高いとは言えそうである。

(18) LIKETH [7 exs.] bare : prep = 3 : 4

- a. Som this, som that, as hym liketh shifte. (WB. 104)
 b. Now herkeneth, if yow liketh for to heere. (Mk. 1983)

(19) BIHOVETH [6 exs.] to Inf only

lest that the charge oppresse thee so soore that thee

bihoveth to weyve thyng that thou hast. bigonne.' (MeI. 1216)

(20) THAR [5 exs.] bare Inf only

"Hym thar nat wene wel that yvele dooth." (Rv. 4320)

(18)の liketh は bare Inf, prep Inf ともに同じような共起を示しているが、(19)の bihoveth のように prep Inf のみと共起するものや、¹⁹ 逆に(20)の thar のように bare Inf のみと共起するものもある。他に to Inf のみと共起する例としては、sit, suffiseth, helpeth, happeth 等がある。また、(20)の thar は前述の nedeth 同様、否定の文脈でしか使用されない。5例の全てが、否定辞の nat や否定副詞の namoore を伴っている。

(21) BE LIEF/LEVERE [7 exs] bare : prep = 4 : 3

a. Noot I nat why, that me were levere slepe
Than the beste galon wyn in Chepe." (Mcp. 23-24)

b. "Now, sires," quod he, "if that yow be so leef
To fynde Deeth, (Pard. 760-61)

非人称動詞以外の動詞で形成される非人称構造は一般に「be 動詞 + 形容詞」の連鎖で表される。この場合、「形容詞」はしばしば比較級になる。上例(21)は非人称動詞以外の非人称構造で最も用例数の多いものでbare Inf, prep Inf ともに同じような共起関係にあると言ってよい。²⁰ この be levere に類似したものに had levere があり(下例(22))、これは ModE での had better に相当する言い方である。ModE の would rather(= ME were levere), had better(= had levere) は bare Inf としか共起しないが、were levere は上記のように prep Inf と共起できる。しかし had levere の方は(22)のように bare Inf と共起する例しか見いだせなかった。

(22) Al had hire levere have born a knave child; (Cl. 444)

(23) BE LOOTH [5 exs] bare : prep = 1 : 4

a. Me were looth be likned, doutelees, (ML. 91)

b. Ful looth were hym to cursen for his tithes (Prol. 486)

この be looth の場合は、prep Inf と共起する率が高いようである。上例以外の「be 動詞 + 形容詞」の非人称構造としては、be wikke, be possible 等があるが、それらと共起する不定詞は全て to Inf である。従って、非人称動詞以外の非人称構造の場合、prep Inf と共起するのが一般的であり had levere のように bare Inf と共起しやすいものは、寧ろ例外的であるということが、『カンタベリー物語』では言えそうである。尚、以上述べたことを表にすると次のようになる。参考までに prep Inf 内での to Inf と for to Inf の分布も []内に付記する。

表V

	Occurrences	bare : prep [to : for to]	
List(e)	52	23 : 29	[24 : 5]
Nedeth	32	11 : 21	[13 : 8]
Oghte	18	12 : 6	[4 : 2]
Liketh	7	3 : 4	[3 : 1]
Bihoveth	6	0 : 6	[6 : 0]
Thar	5	5 : 0	[0 : 0]
Be levere	7	4 : 3	[1 : 2]
Be looth	5	1 : 4	[3 : 1]

3. 韻文と散文による分類

前章迄は、主語機能不定詞を形式主語の it を持つか否かという視点と、人称構文に現れるか非人称構文に現れるかという二つの視点に立って分析してきたが、この章では、第三の視点として、文章形式の違い、即ち、韻文と散文とを比較して主語機能不定詞を論じることにする。まず表VIを見てみよう。

表VI

	bare Inf	prep Inf	Total
Verse	53	180	233

	(22.7%)	(77.3%)	(100%)
Prose	10	46	56
	(17.9%)	(82.1%)	(100%)

表VIには韻文と散文での bare Inf と prep Inf の実際の資料数と生起率を掲げている。では、bare Inf から見ていく。bare Inf は韻文で22.7%に対し散文で17.9%と、僅かに韻文での使用率が高いと言えるが、韻文・散文間で殊更大きな使用率の差があるとは言えない。従って、『カンタベリ物語』では、bare Inf は文章形式によって その分布に大きな相違は生じないものと思われる。寧ろ重要なことは、2.1.の箇所、散文の資料である A Book of London English 1384-1425 やウィクリフ説教集には、主語機能の bare Inf は現れないということであったが、実際に、『カンタベリ物語』の散文の資料では現れているので、「散文」という文章形式が主語機能の bare Inf の出現を規制する制約とは言えそうもない。従って、A Book of London English 1384-1425、ウィクリフ説教集に主語機能の bare Inf が現れないという事実は、文章形式以外の要因にその原因を求めた方が良さそうである。

次に prep Inf だが、これは韻文で77.3%、一方散文では82.1%と、散文での使用率が若干高いことになるが、bare Inf の場合同様、この韻文対散文の対立は prep Inf の使用に関してそれほど多大な動揺を与えていないと言っていだろう。ただ、例文(24)に挙げた prep Inf が直接文法的主語になるタイプについては次のような興味深い事実がある。

- (24) a. Eek for to pride hym of his gentrie is ful greet folie;
(Pars. 461)
- b. 'for to do synne is mannyssh, ... (Mel. 1264)

この用法は Visser によるとME期からの発達ということであったが、『カンタベリ物語』ではあまり見かけない用法であり、全部で20例ほどしか見つけられなかった。その20例の中で、韻文での例が13、散文では7例であるが、この数値は、prep Inf が直接文法的主語になる比率が、韻文では約7%、散文では約15%と、散文での比率が韻文の二倍になるという結果を示している。従って、『カンタベリ物語』では、この prep Inf の直接主語用法は韻文よりも散文に於てその使用率が高いと言える。

4. 結び

『カンタベリ物語』に於ける主語機能不定詞を、形式主語の *it* と共起する
 か否か二よって分類した結果、形式主語の *it* を伴わない形の方が多いことが
 判明したが、このことは人称構文と非人称構文の対立に関連していた。即ち、
 14世紀にはOE期から存続していた非人称構文から人称構文へという統語上の一
 大変化が起こっていたにも拘らず、『カンタベリ物語』では非人称構文が依然
 として優勢であり、その非人称構文は中世では一般に形式主語の *it* を伴わな
 かったということから、*it* を伴わないタイプが多いという事象が理解できるの
 である。従って、非人称構文の人称化現象が進行していた14世紀後半に位置付
 けられる『カンタベリ物語』では、主語機能不定詞を伴う人称化現象はそれほ
 ど顕著には観察されないとと言えるだろう。

よって、『カンタベリ物語』に見られる主語機能不定詞は、ModEからすると、
 原形不定詞や *for to* 不定詞の使用も可能な点、非人称動詞・構造に現れる点
 で違っており、他方、OEからすると、依然として非人称用法を継承している点
 ではOEに近い面があるが、原形不定詞の用例数の少なさ、即ち、前置詞不定詞
 の台頭や、前置詞不定詞の直接主語用法という新用法を含んでいるという点で
 はOEとかなり違う側面を持つと言ってよい。

【 註 】

* 本稿は1987年11月8日に北九州大学で開催された「日本英文学会第40回九州
 支部大会」での英語学シンポジウム「チョーサーの言語と文体」で発表した原
 稿を加筆・修正下ものである。

1 「不定詞主語」の捉え方は学者によって差異がある。Bock (1931:247) は
 「文語に於て、OEの文の主語としての純粋な不定詞の用法はなく (*to*) 不定詞
 は他の名詞主語のように、文頭には現れない」と言う。しかし、Mitchell (19
 85:642) は「SV0型のSとして不定詞が起こることは滅多にないので、文頭に来
 た不定詞のみを主語機能の不定詞と見なす考え方には修正が必要である」とし
 文頭に不定詞が来る場合はラテン語の影響が多大であるとする。

(i) 7 lufigean his nehstan swa hine sylfne thaet is ...

(= *et diligere proximum ...*)

(Cambridge, Corpus Christi College, MS 140, Mark. 12. 33)

Trnka (1930:77) は、不定詞は文法的主語として最も古い英語から存在したとしているし、Jespersen (1940:11. 12) も、主語としての to Inf はOE詩には存在しないが、OEの散文には現れるとし、形式主語の hit を伴うものを例に挙げている。

(ii) hit is ungeliefedlic to secganne.

そして、例文(1a)のような例は、Mosse (1952:101f) が言うように、ME期に於てでさえも寧ろ珍しい構文であったようである。

2 例文(2)~(6)は全て Visser (1966) による。なお、便宜上、thorn は th eth は ð で表している。註の1, 3, 19についても同様である。

3 OED の s. v. To 13a には Bede の Historia Ecclesiastica(c890)の例が初出例として挙げられている。

(iii) Forthon hit is god godne to herianne & yfelne to leanne.

4 チョーサーからの引用は全て Benson(1987) によっている。また、『カンタベリ物語』からの例文には各物語名を Hans Kurath and Sherman M. Khun (eds.), Middle English Dictionary, Plans and Bibliography, (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1957) により略記し、行番号を施した。但し『カンタベリ物語』の略記号CTとグループ記号であるA, B等は省略した。

5 不定詞表示辞 (to と for to) を客観的に捉えるために、以下本稿の『カンタベリ物語』からの資料は、単独の不定詞が起こる場合のみの数値を示している。従って、二つ以上の不定詞が連結された場合の数値は含まれていない。

6 田島松二、“Verbals in Piers the Plowman (III): Infinitive,”『文芸と思想』 No. 32 (1968), pp. 6-8.

7 田島松二、“On the Use of the Infinitive in the Works of the Gawain-Poet,”『文芸と思想』 No. 36 (1972), pp. 8-11.

8 A. R. Warner, “Infinitive Marking in the Wyclifite Sermons,” English Studies 56 (1975), p. 208.

9 A Middle English Syntax, Part I, Parts of Speech.

10 Curme (1931:139) によれば、アイルランド英語では次のような人称構文

に於て bare Inf が一般的であるという。

(iv) It's best for you give in to their way.

11 "The Use of the Infinitive in A Book of London English 1384-1425," Neophilologische Mitteilungen 59, p.181.

12 ME期に入り、prep Inf (特に to Inf) が優勢になったことについて Trnka (1930:75) は古ノルド語 (Old Norse) で prep Inf が通常使用されていたことの影響ではないかと言っている。

13 また、Brunner (1963:89) は、OE末期に bare Inf は益々その現れ方が少なくなり、ME期にはある特定の動詞の後のみ現れるようになったと述べている (例えば、知覚動詞、do 等の後である)。

14 Kaartinen and Mustanoja 1958, p.181.

15 Warner 1975, p. 208.

16 『英語法助動詞の発達』, pp.288ff.

17 Cf. J. Kerkhof, Studies in the Language of Geoffrey Chaucer, 2nd and enlarged edition (1982), p.86.

18 Cf. U. Ohlander, "A Study of the Use of the Infinitive Sign in Middle English," Studia Neophilologica 14 (1941-42), p.64.

19 田島 (1972:11) では、bihoveth は下例のように bare Inf と共起すると報告されている。

(v) when he the gome metes,
And bihoues his buffet abide without debade more
(Sir Gawain and the Green Knight 1753-54)

20 田島 (1972:11) は、ガウェイン詩群では、lever be (= be levere) は bare Inf のみと共起すると述べている。

【 参考文献 】

Benson, L.D. ed. 1987. The Riverside Chaucer. 3rd edition. Boston: Houghton Mifflin.

Bock, H. 1931. "Studien zum praepositionalen Infinitiv und Akkusativ

- mit dem to-Infinitive." Anglia 55.114-249.
- Brunner, K. 1963. An Outline of Middle English Grammar. trans. G.K.W. Johnston. Oxford: Blackwell.
- Callaway, M. Jr. 1913. The Infinitive in Anglo-Saxon. Washington, D. C.: Carnegie Institution.
- Curme, G.O. 1931. A Grammar of English Language. Vol.3. Syntax. Boston: D.C. Heath & Co.
- Davis, N. et al. 1979. A Chaucer Glossary. Oxford: Clarendon Press.
- Jespersen, O. 1940. A Modern English Grammar on Historical Principle. Part V. Copenhagen: Ejnar Munsgaard.
- Kaartinen, A. and T. F. Mustanoja. 1958. "The Use of the Infinitive in A Book of London English 1384-1425." Neophilologische Mitteilungen 59.179-192.
- Kenyon, J.S. 1909. The Syntax of the Infinitive in Chaucer. Chaucer Society. 2nd series No.44. London.
- Kerkhof, J. 1982. Studies in the Language of Geoffrey Chaucer. 2nd and enlarged edition. Leiden: Leiden Univ. Press.
- Mitchell, B. 1985. Old English Syntax. 2 vols. Oxford: Clarendon Press.
- Mosse, F. 1952. A Handbook of Middle English. trans. J.A. Walker. Baltimore: Johns Hopkins Press.
- Mustanoja, T. F. 1960. A Middle English Syntax. Part I. Parts of Speech. (Memoires de la Societe Neophilologique de Helsinki 23.) Helsinki: Societe Neophilologique.
- Ohlander, U. 1941-42. "A Study on the Use of the Infinitive Sign in Middle English." Studia Neophilologica 14.58-66.
- 小野 茂. 1969. 『英語法助動詞の発達』. 東京: 研究社.
- Peters, R.A. 1980. Chaucer's English. (Journal of English Linguistics. Occasional Monograph I.)
- Quirk, R. and J. Svartvik. 1970. "Types and Uses of Non-finite Clause in Chaucer." English Studies 51.393-411.
- 田島松二. 1968. "Verbals in Piers the Plowman (III): Infinitive." 『文芸と思想』 No.32, 1-55. 福岡女子大学文学部.
- 1972. "On the Use of the Infinitive in the Works of the Gawain-Poet." 『文芸と思想』 No.36, 1-56. 福岡女子大学文学部.

- Trnka, B. 1930. On the Syntax of the English Verb from Caxton to Dryden. (Travaux du Cercle Linguistique de Prague 3.) Prague.
- Visser, F. Th. 1966. An Historical Syntax of the English Language. Part II. Leiden: E. J. Brill.
- Warner, A. R. 1975. "Infinitive Marking in the Wyclifite Sermons." English Studies 56. 204-214.